

岩手県野田村の支援活動報告（2011年12月3日）

— 野田村・現地体験学習会 —

12月3日朝6時15分、野田村行きバスは、弘前大学前を出発しました。天候が心配されましたが、なんとかこのときはもっていました。いつものように、バス内での自己紹介がありました。野田村に到着すると、初めての方もいるので、津波で破壊された海岸の現場を見学しました。このころになると、風雨が激しくなっていました。10時すぎにえぼし荘に、李先生のオリエンテーションのあと、「災害ボランティアの16年」と題して、渥美公秀（大阪大学）さんの講演が始まりました。



道の駅おりつめでの集合写真



津波で破壊された海岸の現場



ボランティアとは、無償性と自発性という。それは、報酬をもらうかもらわないかではなく、「お金とは関係がない」（お金がでるとかでないとかどちらでもいい）という意味、自発性は相手に求めると危険、「勝手にいく」ということなどテンポよく話しが進みます。

ご自身のボランティア経験から、ボランティア活動の変化が語られます。

1995年から2005年までの10年間はほんとに災害が多かった。さらに、今度の震災。ボランティア活動も、ボランティアのコーディネート、災害ボラセン、集落の組織化とすすむなかで、被災者がおきざりにされる結果になってしまった。つねにボランティアには秩序化のドライブがかかる。有用性（役に立つ）と効率をこえて、被災者によりそう原点回帰が必要になった。そこに足湯という方法がある。効率が悪いが、一対一で向き合う。今日の講演は来年の講義のイントロになりました。



11時から、貫牛利一氏の講演をいただきました。野田村在住で、久慈市観光物産協会に勤務、現地事務所などボランティア活動を支援していただいている方です。名字の由来・野田村の由来について語りながら、若いときには自己紹介にためらいがあったという意



「足湯」の実習（神戸の皆様をお迎えして）

外な話しから始まりました。野田の外に出て戻ったら、青年会はあるのだが、活動に集まる若い人がいない。そこで、村おこしではなく、欽ちゃんの仮装大賞に応募することを提案してみた。「バニーちゃんに会いにいこう」。その年の1月に説得で5人集まった、3月に20人、4月下旬、TV出演が決定して、30人の仲間が集まるようになりました。

毎回行われた飲み会の効用で、お互いのことを知ることができたといいます。仮装大賞の結果は・・・20点、満点でした。100万の賞金をもらっても、赤字だったが、30人の仲間と増えた支持者、次につながる効果があったといいます。それが野田塩ソフトにつながったのです。私見ですが、おふたりの共通点は、ボランティアといわないボランティア、村おこしといわない村おこし、言葉にとられるなということではなかったでしょうか。

食事のあと、足湯とツリー作りにわかれしました。天候のため、仮設住宅からの参加者は多くはありませんでした。「学生さんが来てくれたから」と、参加してくさった方には感謝、感謝です。足湯はリラックスしてつぶやく声に耳を傾けるため、かわいいツリー作りもお話のためのツールです。一人一人に向き合うボランティアの文字通り、足がかりになりました。ほんとに、足湯はぽかぽか、ツリーはとってもかわいい、すぐれものです。

午後からは、矢守先生（京都大学）が神戸の震災語り部の方とやってこられました。個人的におききしたお話をかきます。私は、1年に1回授業で矢守克也先生の、阪神淡路大震災の語り部活動を取りあげることにしています。その活動の方々に直にお話をうかがえたのには感激しました。地域は違っても災害の悲惨さはわかりません。神戸で使われている小学生向け副読本をいただきました。「しあわせはこぼう」と題された副読本は、さまざまな状況で震災を体験した小学生の作文とお母さんの話しをもとに作られています。小学生の言葉で震災が描かれるのです。すばらしい本でした。

作道信介